

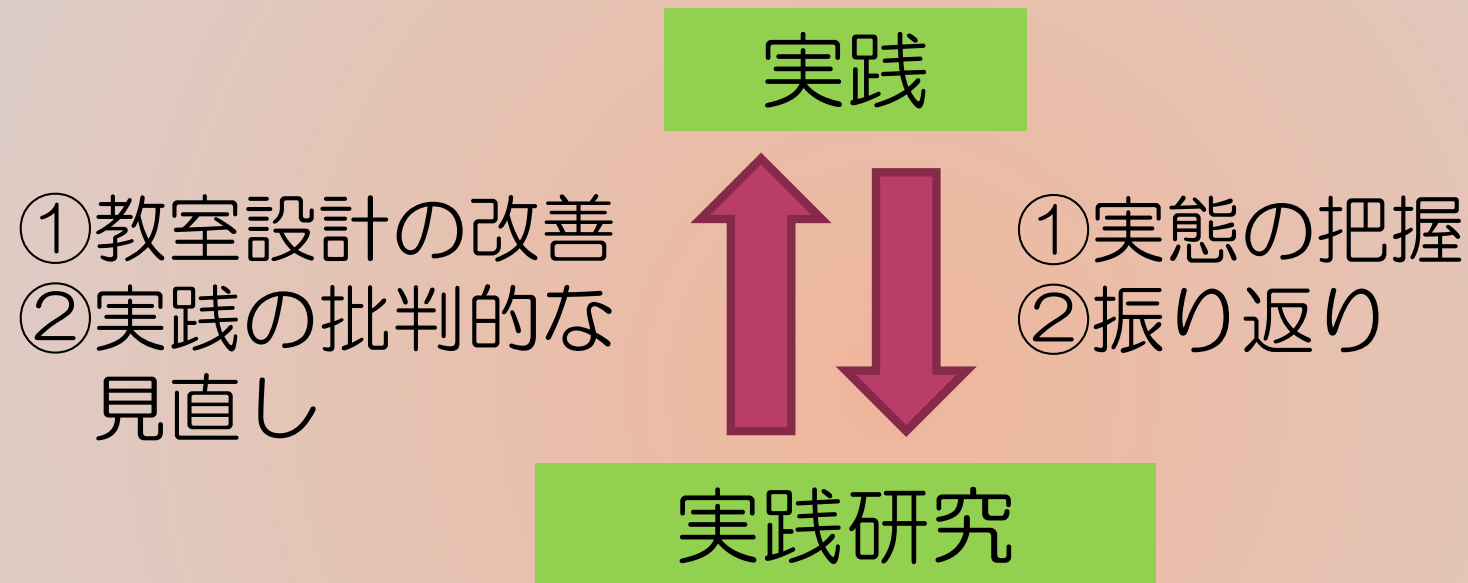
調査報告② (実践研究論文)

寅丸真澄

早稲田大学大学院生

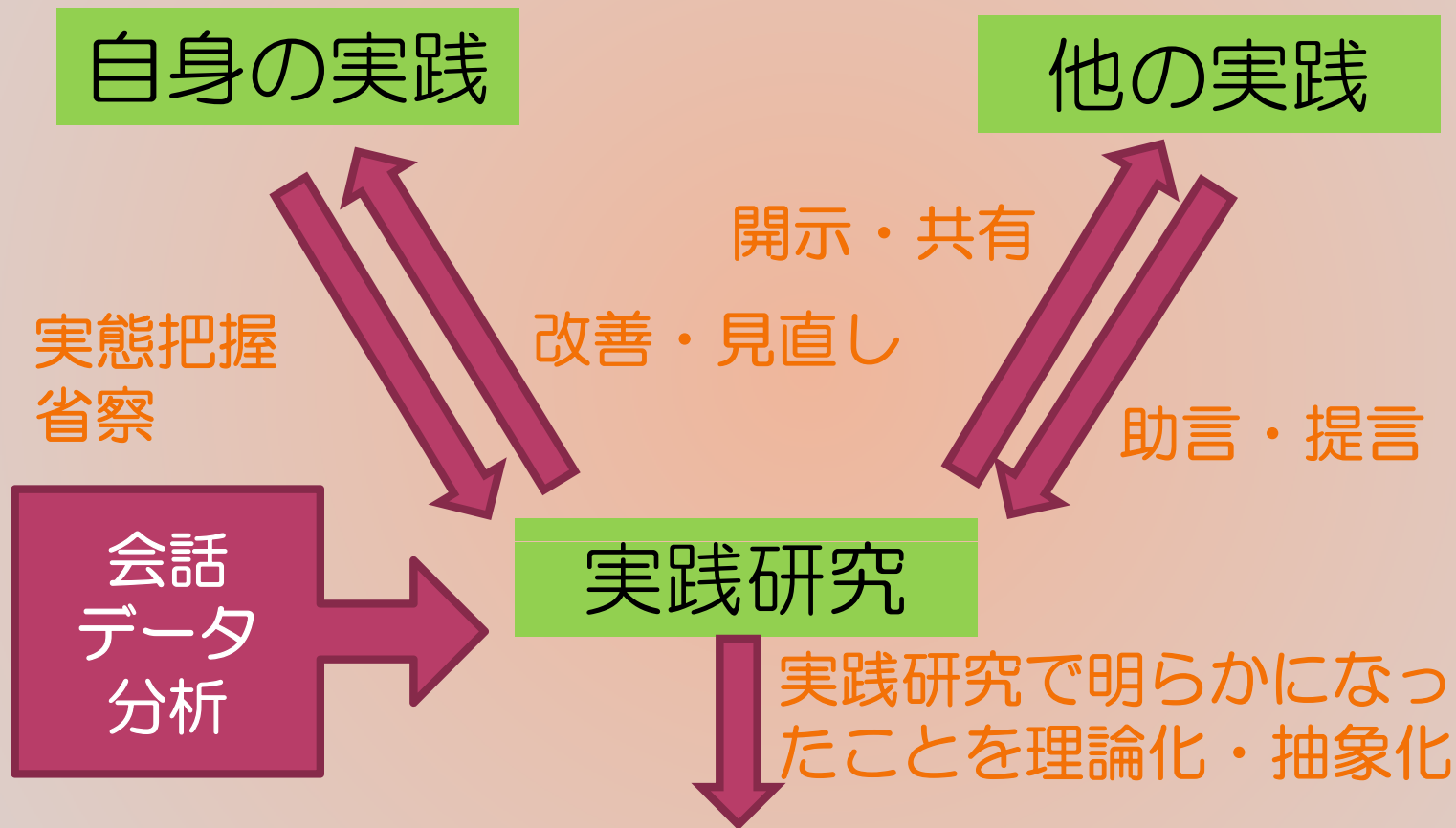
1. はじめに

1.1 なぜ実践研究論文の調査なのか



教室を改善し、見直すためには教室活動の実態の把握や振り返りが必要。実態を可視化する方法として会話データ分析が有効。会話データ分析をどのように利用すべきか？

1.2 実践研究における会話データ分析の意義



実践から立ち上がる理論（舘岡2008）

1.3 コミュニケーション観の変容と 実践研究の変遷

1980年代

実践の報告から研究へ

- (1) 言語知識の習得を重視したコミュニケーション能力育成のための実践研究が始まる
- (2) 大学の日本語教育のほか、難民日本語教育の実践研究なども行われる

1983年
1985年

「留学生10万人受け入れ計画」
国立8大学に留学生教育センター設置

1990年代

実践の目的、場、方法の拡大、 実践の多様化、メタ研究の出現

(3) 実践の目的、場、方法の拡大し、実践研究が多様化する

例) 目的：コミュニケーション能力、ストラ
テジー能力の育成など

場：異文化理解教育、日本事情教育など

方法：PCを用いた実践など

(4) 実践研究の方法の提案、あり方に言及する
論文が書かれる

-
- 1991年 『日本語教育』 73号特集「コミュニケーション・アプローチを
めぐって」、75号特集「日本語授業の分析と教育の改善」
- 1992年 78号特集「日本語教育とCAI」
- 1994年 82号特集「専門分野別日本語教育」、83号特集「年少者
のための日本語教育」

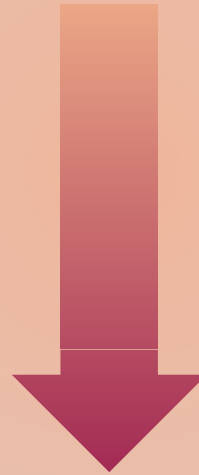
1980年代

コミュニケーション
観の変容

言語知識を重視

1990年代

学習者の言語形式
のみならず、
方略能力に着目



方略的知識，能力を重視

2000年代

実践，実践共同体，社会への 還元と連携

(5) 多岐にわたる実践の成果が学会発表や論文
発表を通して他の実践現場に還元

※JSL児童生徒に対する教室実践 留学生の
協働学習，教師養成に関わる研究など

(6) 社会的な問題に対処するため，社会と
連携するようになる

※JSL児童の日本語能力評価に関する提言など

2004年 「実践研究フォーラム」開始

「フォールドの学としての日本語教育実践研究」（石黒2004）

2005年 『日本語教育』126号特集「日本語教育の実践報告－
現場の知見を共有する－」（細川2005など）

2006年 128号特集「年少者日本語教育の現在－その課題と展望」

2008年 138号特集「「多文化共生社会と日本語教育」について」

コミュニケーション観
の変容

1990年代

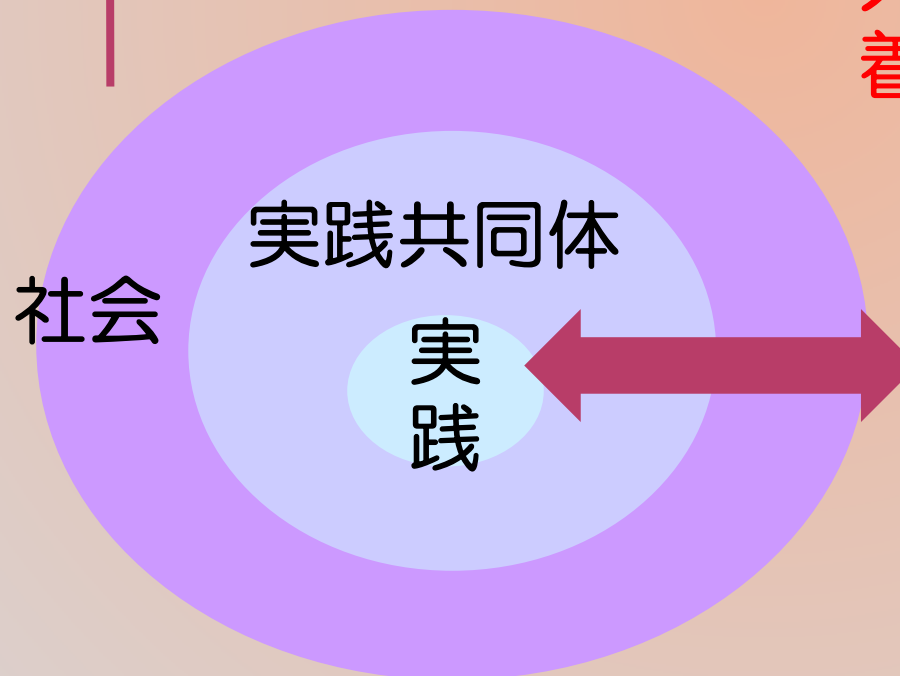
方略的知識, 能力

2000年代



相互行為, 対話

相互行為分析, 批判的談話分析などが出現
人と人の関係性に着目



実践, 実践共同体,
社会への還元
と連携

2. 調査概要

2.1 調査目的

会話データ分析は，実践研究論文において
どのように利用されてきたのか？



学会誌『日本語教育』の創刊号～150号に
掲載された実践研究論文を，歴史的，社会的
状況をふまえて年代別に量的・質的に分析

2.2 調査対象

(1) 学会誌『日本語教育』創刊～150号の分類
掲載論文（全1611本）

研究論文 (1158本)	実践研究論文 (191本)	その他 (262本)
-----------------	------------------	---------------



会話データ分析を行っている論文39本を認定

(2) 「実践研究論文」の認定基準

- ①学会誌において「実践報告」と区分された論文
- ②実践者や実践に関わる者が、実践現場をデータとして、実践の内実（目的・理念・方法・活動・内容・プロセス・結果など）を具体的に記述・分析し、その意義・改善・提言などについて考察した研究

(3) 「会話データ分析」として認定した論文

文の単位を超える二発話以上連続したまとまりのある単位からなる話し言葉を分析データとして，談話レベルの会話の減少を記述している論文

3. 会話データ分析を行う論文の分析 (②実践研究論文)

3.1 論文数の推移と実践が行われた場所

表1 年代別の論文数と「実践が行われた場所」

年代	掲載論文数	実践研究論文数	会話データ分析の論文数	①実践が行われた場所				
				大学	小・中学校	地域日本語教室	国内その他教育機関	海外
1960年代	58	3	0	0	0	0	0	0
1970年代	250	15	0	0	0	0	0	0
1980年代	390	73	2	1	0	0	1	0
1990年代	442	59	12	12	0	0	0	0
2000年代	471	41	25	12	8	3	0	2
合計	1,611	191	39	25	8	3	1	2

3.2 年代別傾向

1980年代

実践の報告から研究へ

言語知識の重視（言語形式に着目）

表2 実践研究論文のキーワード（一部）

学習者	研究対象	研究内容
なし	日本語入門クラス，難民日本語教育	CLL，TPR，ドラマ方式，外国語教授法，コミュニケーション能力，聴解指導，聴解能力優先，談話展開

1980年代の会話データ分析

(1) 分析データの種類

教室活動中の会話，寸劇の会話など

(2) 分析項目

特定の教授法を使用した授業の展開，特定場面における登場人物のやりとりなど

(3) 実践現場への活用

- ①コミュニケーション能力の育成を目的とした教授法の検証，普及のために会話データ分析を利用
- ②実践研究が自身の授業改善に寄与
- ③他の実践現場へ教授法を普及させる目的でも利用

1990年代

実践の目的，場，方法の拡大，
実践の多様化，メタ研究の出現

方略的知識，能力の重視（方略能力に着目）

表3 実践研究論文のキーワード（一部）

学習者	研究対象	研究内容
上級学習者， 中・上級学習者， 学習者	話し言葉教育（2） 異文化理解教育，専門日本語教育，待遇表現教育，日本事情，多文化クラス，体験学習，日本人家庭訪問，ディベカッション，プロジェクト・ワーク，読解，文法学習，情報伝達学習，聴解練習	コミュニケーション（3），コミュニケーション能力，コミュニケーション方略，インターアクション，カウンセリング，グループ・ダイナミクス，グループでの問題解決，読解の技能とストラテジー，異文化理解，学習ストラテジー，思考過程，学習の動機づけ，感受による学習・習得，談話の展開標識，ティーチャー・トーク，独話，授業に関係のあるレベル・シフト

1990年代の会話データ分析

(1) 分析データの種類

教室活動中の会話，ロールプレイ，フィールド・トリップなどの教室外活動の自然会話など

(2) 分析項目

学習者の談話構成，文法能力，運用ストラテジーの習得，活動中の思考過程，学習者間のやりとりなど

(3) 実践現場への活用

- ① コミュニケーション能力や学習ストラテジーの測定，検証や，新たな機材・教具の使用方法の検討に利用
- ② 実践研究の手法として様々な分析方法を紹介

2000年代

実践，実践共同体，社会への還元と連携

相互行為，対話の重視（人と人の関係性に着目）

表4 実践研究論文のキーワード（一部）

学習者	研究対象	研究内容
JSL児童生徒，JSLの子ども，外国人児童生徒，子どもたちの多様化，年少者	ピア・レスポンス（2），協働（2）対話（2），ピア・リスニング，協働的实践，協働学習，大学のための文章教育，年少者日本語教育，イマージョン・プログラム，多文化プロジェクト，二文化統合理解学習，音声教育実践，相互学習，取り出し授業，発音学習，ピア・モニタリング活動，在籍学級の授業	コミュニケーション，社会性，JSLバンドスケール，構成的エンカウターグループ，児童間インターアクション，グループ・モニタリング，教室のインターアクション，教室内のネットワーク，相互行為，調整行動，日本語運用力，日本語能力，ストーリーテリング，ロール・プレイ，シナリオ・プレイ，コンピュータ教材，教師と学生の役割，サイド発話，発話機能，やりとりの特徴に見られるプロセス，自発的発話，母語の役割，コミュニケーション・ストラテジー，リソース，リライト教材，自己モニター，評価，学びのプロセス

2000年代の会話データ分析

(1) 分析データの種類

教室活動中の会話，教室外活動の会話，ロールプレイ，寸劇の会話など

(2) 分析項目

運用ストラテジーの習得，モニタリング能力，人間関係の構築過程，教科学習の問題点など

(3) 実践現場への活用

- ①様々な実践の成果（協働学習など）を可視化
- ②JSL児童の日本語能力の育成や評価など社会的な問題に関わる実践研究でも利用

4. まとめ（②実践研究論文）

－多様化と社会化

- | | |
|--------|--|
| 1980年代 | (1) 会話データ分析は、実践者自身の実践の改善と、特定の教授法の普及のために利用 |
| 1990年代 | (2) コミュニケーション能力の育成を重視する
コミュニケーション観の変容と、教師の自己成長を促す実践研究の必要性から普及 |
| 2000年代 | (3) 実践の多様化に伴い、会話データ分析が対象とするデータの種類や分析項目が多様化
(4) 実践の社会化に伴い、実践共同体への還元や、社会的な視点をふまえた会話データ分析（相互行為分析、批判的談話分析など）が行われるようになった |

今後ますます多様化と社会化が進むと考えられる。
自身のコミュニケーション観や実践研究の目的に
ふさわしい会話データ分析とは？

参考文献

石黒広昭(2004)「フィールドの学としての日本語教育実践研究」『日本語教育』120号, 1-12

岡崎敏雄・岡崎眸(1997)『日本語教育の実習―理論と実践』アルク.

川上郁雄・高橋理恵(2006)「JSL児童の日本語能力の把握から実践への道すじ―新宿区大久保小学校の実践をもとに―」『日本語教育』128号, 24-35.

齊藤ひろみ(2006)「「子どもたちのことばを育む」授業作り―教師と研究者による実践研究の取り組み」『日本語教育』126号, 35-44.

舘岡洋子(2008)「協働による学びのデザイン―協働的学習における実践から立ち上がる理論」細川英雄・ことばと文化の教育を考える会(編著)『ことばの教育を実践する・探求する―活動型日本語教育の広がり』凡人社, 41-56.

谷口すみ子(1991)「思考過程を出し合う読解授業：学習ストラテジーの観察」『日本語教育』75号, 37-50.

徳井厚子(1997)「異文化理解教育としての日本事情の可能性―多文化クラスにおける「ディベカッション」(相互交流型討論)の試み―」『日本語教育』92号, 200-211.

- 原田三千代(2006)「中級学習者の作文推敲過程に与えるピア・レスポンスの影響―教師添削との比較」『日本語教育』131号, 3-12.
- 藤原雅憲(1992)「CAI学習と授業過程の分析―文法学習を中心として―」『日本語教育』78号, 67-78.
- 文野峯子(1991)「授業分析と教育の改善―客観的な授業分析の試み―」『日本語教育』75号, 51-63.
- 細川英雄(2005)「実践研究とは何か―「私はどのような教室をめざすのか」という問い」『日本語教育』126号, 4-14.
- 溝口博幸(1995)「インターアクション体験を通じた日本語・日本事情教育―「日本人家庭訪問」の場合」『日本語教育』87号, 114-125.
- 村野良子(1984)「ドラマ方式を用いた日本語授業―日本語教育映画を使った場合―」『日本語教育』53号, 83-92.
- 山本一枝(1987)「Community Language Learningの応用―コミュニケーションのための学習活動として」『日本語教育』61号, 105-125.

ご清聴ありがとうございました。